様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ２３ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ００４９８

研究課題名（和文）啓蒙時代後期における喜劇の作劇法と受容の研究―レッシングとヴァイセの比較

研究課題名（英文）Dramaturgy of comedies and their reception in the late German Enlightenment Age - In comparison between Lessing and Weisse

研究代表者
小林　英起子（KOBAYASHI, EKIKO）

広島大学・人間社会科学研究科（文）・教授

研究者番号：６０５７１０６５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：『ハンブルク演劇論』を理論とし、レッシングとヴァイセ喜劇の作劇法と受容を比較した。レッシング喜劇はディドロの影響を受けて性格描写が練り上げられ、劇構造が計算され緻密である。ヴァイセは徳を称え涙を誘う感動喜劇や、単純な筋で音楽も使う児童演劇を書いた。お金を巡る友情と博愛精神、神の摂理は両者に共通し、ユートピアを描く。レッシングの『ミンナ・フォン・バルンヘルム』『自由思想家』、ヴァイセの『アマーリア』『大金持ちの両親のよい子達』等である。
　劇作家に俳優も協力しノイバー夫人、エクホーフ、アッカーマン等が演技の改革に奮闘した。エクホーフはヴァイセの『エフェズスの寡婦』を評価しコッツェブーも舞台化した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究はドイツ啓蒙時代後期を代表するレッシングとC.F.ヴァイセの喜劇の魅力を、作劇法と同時代における受容の観点から分析した。レッシングは文学・演劇史で重視される劇作家だが、ヴァイセこそ当時の人気作家であった。数多いレッシングの草稿喜劇は周到な準備と推敲の跡を示す。ヴァイセは官吏の仕事の合間に執筆し、流行に乗った喜劇を量産して大衆の人気を博した。
　レッシングには古典喜劇の高い評価が与えられている一方、ヴァイセの喜劇は忘れ去られてきた。後者も博愛精神や感傷的で感動させる喜劇や先駆的な児童演劇によって啓蒙時代の観客の心をつかんでいたことを確かめることができた。論文と翻訳書が成果の一端である。

研究成果の概要（英文）：This study aims to examine and compare the dramaturgy and the reception of Lessing's and C.F.Weisse's comedies. Lessing improved the characterization influenced by Diderot. His comedies appeal to audiences’ reason. The structure of "Minna von Barnhelm" is calculated and elaborate. Weisse adapted popular topics in his dramas, in which virtue and charity are praised. He wrote many short comedies for children with easy episodes and music. Financial assistance of friends, philanthropy and Divine Providence are common themes in their comedies, such as Lessing's "Der Freigeist"(1749),"Minna von Barnhelm"(1767), Weisse's "Amalia"(1765), "Die kleine Aehrenleserinn”(1777) and "Gute Kinder der Aeltern groesster Reichtum"(1780).
　In order to stage Lessing's comedies, Mrs. Neuber, Ekhof, Ackermann etc. made strenuous efforts at the reform of theatrical performances, which improved the status of the actors. Ekhof valued Weisse's "Matrone von Ephesus" and Kotzebue made it part of his repertoire.

研究分野：ヨーロッパ文学

キーワード：ゴットホルト・エフライム・レッシング　クリスチャン・フェーリクス・ヴァイセ　啓蒙喜劇　作劇法　ハンブルク演劇論　性格喜劇　感動喜劇　児童演劇

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

論文「旅と啓蒙―近代黎明期のドイツ文学における旅の表象とその変遷」（日本独文学会研究叢書 119 所収）（2016）をまとめた際、巡業する役者も啓蒙思想の伝達者であると実感したことがある。また 2017 年頃、西洋比較演劇研究会における演劇論のプロジェクトでレッシングの解説と『ハンブルク演劇論』の抄訳を担当した際、この演劇論は確かに有名ではあるが、その中でレッシングが言及している作品や劇作家と俳優についてはいまだ謎の部分が多くあると痛感したことがこの研究のきっかけである。啓蒙時代後期、レッシング以上に人気があり、大衆を魅了した劇作家達、例えばクリスチャン・フュルヒテゴット・ゲラートやクリスチャン・フェーリクス・ヴァイセなども、今日手つかずの分野になっている。

C.F.ヴァイセの戯曲全集や児童文学雑誌はドイツ語圏の大学図書館などでしか閲覧できない。私はレッシングの友人ヴァイセの喜劇にも関心があり、18 世紀の俳優の伝記書、上演記録も参照できれば、啓蒙時代後期の劇作家の受容も明らかにできると考えた。レッシングの喜劇について私のこれまでの研究も応用して、作劇法の視点から新しい研究成果をとり入れて、ヴァイセの作劇法と比較してみようと考えたことが背景にある。

２．研究の目的

本研究の目的はレッシングの『ハンブルク演劇論』を理論的支柱として、その中のとりわけ演技論、俳優論、喜劇論、悲劇論を検討し、レッシングの喜劇とヴァイセの代表作品の作劇法と感情の描写の特徴を分析し、比較することにある。

(1)　啓蒙時代の劇作家の中でヴァイセの作品は校訂版がなく入手困難で、18 世紀当時の初版を閲覧する必要がある。この研究の独自な点は、啓蒙時代後期のレッシングとヴァイセの喜劇を比較して、作劇法の違いを探ることである。レッシング喜劇は巧みな性格描写に加えて、劇構造が周到に計算されている。これまでに研究したヴァイセの喜劇では、素朴な性格描写とストーリーの単純さの一方で感動的な台詞の応酬が目立っている。大衆演劇の傾向が予想された。

(2)　数の多いレッシングの未完喜劇や草稿にも目を通し、彼が本来めざした結末や啓蒙精神の片鱗を読み取りたい。当時珍しかったヴァイセの児童演劇にも着目して、作劇法のみならず、子どもたちや家庭の姿、躾、教訓、社会教育なども分析してみたい。

(3) さらに、両者の喜劇の当時の舞台化を明らかにすることである。上演記録や俳優の手紙、自伝書も参照する。上演の記録が分かることで受容の広がりが明らかとなり、劇作家と俳優の関係も見えてくるだろう。

３．研究の方法

レッシングとヴァイセの喜劇の作劇法を解明し、啓蒙時代後期における両者の喜劇の受容を明らかにするために、以下の研究方法をとった。

(1)　レッシングの『ハンブルク演劇論』における批評の検討。

①　レッシングとゴットシェートの文芸論の比較、レッシング初期の喜劇

啓蒙時代前半に強かったゴットシェートの影響力は、18 世紀後半には衰えを見せ、ドイツでは理性重視の諷刺喜劇から感動喜劇への傾向が強まる。私は『ハンブルク演劇論』の演技論、喜劇論、悲劇論を理論的支柱として、レッシングの劇における感情表現の手法を導き出したい。

ゴットシェートの喜劇論、悲劇論も参照し、レッシングの演劇論との違いを検討する。ゴットシェートの影響を受けたレッシング初期の喜劇の作劇法も検討する。

②　レッシングの啓蒙後期における喜劇の作劇法とディドロの受容

『ハンブルク演劇論』およびレッシングが翻訳した『ディドロ氏の演劇』を参考にして、レッシングおよびヴァイセや周辺の作家の喜劇におけるディドロの演劇論の影響を検討する。レッシングの『ミンナ・フォン・バルンヘルム』（1767）の作劇法を分析することで、人物造形、性格描写におけるディドロの受容を確認する。ディドロが唱えた、悲劇と喜劇の中間にあたる「ま

じめなジャンル」がレッシングの演劇作品ではどのように展開したかを明らかにする。

(2)　レッシングの断片喜劇『善人ナータン』、中期の未完喜劇などの作劇法の分析

レッシングは1750年代に何度も喜劇の構想を立てるが、悲劇に傾倒して、完成した喜劇がない時期が続く。だが、断片喜劇や草稿、アウトラインのメモも丁寧に目を通してみたい。多作で大衆に受けたヴァイセに比べて、レッシングは推敲を綿密に重ねてから作品を発表した様子がうかがえる。レッシング喜劇に関する私の先行研究の成果をここでは応用し、最新の二次文献を使い、中期断片から『ミンナ・フォン・バルンヘルム』へ集成していくその手法を分析する。『賢者ナータン』の基になった断片喜劇『善人ナータン』も参照して、喜劇の傾向を探る。

(3)　ヴァイセの代表喜劇の作劇法

ヴァイセの処女作『エフェズスの寡婦』や1760年代のヴァイセの代表喜劇『アマーリア』『策略には策略を』『貧乏と徳操』『試される友情』を例に、劇作術の特徴を探ってみる。18世紀では劇作仲間がふつうに模倣をしあっていた。ヴァイセは成功したレッシングの作品を非常によく研究していた。ヴァイセの喜劇『エフェズスの寡婦』をレッシングも参考にして翻案を手がけたが未完にとどまった。両者の同じ題名の喜劇も比較して分析したい。

(4)　ヴァイセの児童・青少年演劇の作劇法

ヴァイセは児童文学の分野で名高く、1775年から1782年まで週刊紙「子どもの友」を発行し続けた。そこに掲載された24篇の児童演劇、青少年向け演劇は、他にまねのできない先駆的な試みであり、それまでのヴァイセの演劇手法が集約されているようだ。できるだけ多くの児童演劇に目を通して、劇作術の特徴を探ってみたい。

(5)　啓蒙時代後期における俳優による舞台化の実情と受容

啓蒙時代後期にドイツ演劇の水準が向上した背景には、文学の舞台化に奮闘した俳優たちの懸命な努力があった。『ハンブルク演劇論』の舞台批評と俳優論を検討し、当時の演劇新聞の劇評も参照する。さらにレッシングやヴァイセと関わった俳優の自伝書や劇団の上演記録や演劇綱領を参照する。劇作家と俳優の協力関係も調べてみたい。

４．研究成果

2020年度

(1)　『ハンブルク演劇論』を理論的支柱とし、その演劇論における演技論、喜劇論、悲劇論を検討した。その考察から、論文「レッシングの『ハンブルク演劇論』における演技観」(『ドイツ語文化圏研究』(2021) 第17号 pp.1-19) を発表した。

(2)『ハンブルク演劇論』におけるレッシングの批評を手がかりに初期啓蒙時代のザクセン類型喜劇に属するJ.E.シュレーゲルの喜劇と後期啓蒙時代のC.F.ヴァイセの喜劇と感情描写の特徴を比較した。広島独文学会（2020年9月19日広島大学zoom開催）では中間成果を「啓蒙喜劇の作劇法の比較―J.E.シュレーゲルの『忙しげな怠け者』とC.F.ヴァイセの『貧乏と徳操』、『策略には策略を』を例に」と題して口頭発表をした。

(3) 日本演劇学会研究集会における口頭発表では、ヴァイセの「子どもの友」に1775年から1782年にかけて掲載された児童演劇の先駆的な作品に着目し、作劇法の特徴として素朴な性格描写と簡素な筋、善悪の強調、父親の視点からの躾、感動喜劇の傾向が見られる点を指摘した。(2020年11月15日京都芸術大学zoom開催)

(4) ヴァイセの代表喜劇『アマーリア』の劇構成と舞台批評を、『ハンブルク演劇論』におけるレッシングの意見を一つの手がかりとして考察した。レッシングの悲劇『ミス・サラ・サンプソン』をヴァイセが一度、悲劇に翻案した。これはレッシングの助言によって喜劇へ書き直された。第Ⅰ幕では悲劇の色彩が濃かったが、男装のトリックで喜劇性が与えられ、感傷的場面と感動的セリフが増えてヴァイセの代表作になっている。(論文「レッシング『ハンブルク演劇論』におけるクリスチャン・フェーリクス・ヴァイセ批評　―『アマーリア』の劇作術と上演をめぐって」『表現技術研究』15号（2020）pp.(17)-(25)所収)

(5) アジア・ゲルマニスト会議札幌大会論文集に収められた論文“Philanthropie in der Kinderwelt - Das Bild von Armut und Reichtum in C.F. Weisses Kinderschauspielen”In:“Einheit in der Vielheit? Germanistik zwischen Divergenz und Konvergenz”Muenchen: Iudicium Verlag 2020, pp.373-378 では、ヴァイセ児童演劇では貧富の格差が見られるが、富裕層の父親や子ども達が階層を超えて博愛精神を示し、貧しい子ども達の気高い振舞いが啓蒙思想を表現すると述べた。

ヴァイセ児童演劇 24 篇のうち 12 篇を解析した中間報告を、論文「クリスチャン・フェーリクス・ヴァイセの児童演劇にみる作劇法」(「広島大学文学部論集」(2020) 第 80 号所収) にまとめた。

2021 年度

ヴァイセの児童演劇・青少年演劇を中心にして、さらに『アマーリア』『策略には策略を』『貧乏と徳操』の劇作術の特徴を深く調べた。コロナ禍による緊急事態宣言や蔓延防止等重点措置の事態が続き、国内も国外へも学会出張をすることができなかった。洋書が届くのに 2, 3 か月要し、手元にある資料を研究室で解析していった。

(6) 啓蒙主義初期の J.E.シュレーゲルの喜劇『忙しい怠け者』をヴァイセの『アマーリア』の作劇法と比較した。前者はザクセン類型喜劇に属し、ゴットシェート派の理論に従って主人公の極端な性癖や弱点を描き嘲笑の対象としているが、後者はこうした手法を脱して主人公の徳と寛容な心が人間を改悛させ、幸福な結末へ導いている。人物の感情表現が増え、嘲笑は姿をひそめ、人間の美徳を称え感動させることで観客の涙を誘う感動喜劇に進化している。この比較を論文「啓蒙喜劇の作劇法をめぐる比較考察 —J.E.シュレーゲルの『忙しい怠け者』と C.F.ヴァイセの『アマーリア』を例に」(『ドイツ文学論集』54 号 (2021)、 pp.21-36) にまとめた。

(7) レッシングとヴァイセと交流があったノイバー座主宰のノイバー夫人の序幕と喜劇の作劇法を調べ、論文「フリーデリケ・カロリーネ・ノイバーの序幕と喜劇におけるアレゴリーと娯楽性」(『広島ドイツ文学』34 号 (2021) pp.63-78) にまとめた。ゴットシェート派の演劇改革にしたがって道化役を放棄してはいるが、ノイバー夫人の 3 篇の『序幕』によれば、それが不本意との気持ちがにじみ出ている。移動劇団としてのノイバー座は北ドイツの劇場、各地の宮廷劇場で興行を許されて営みが成り立っていたことが分かる。ノイバー夫人の祝祭喜劇にはバロック劇やハウプト・ウント・シュターツアクツィオーンの名残があり、牧人劇の形式による喜劇が彼女の傑作へ発展した系譜を明らかにした。

(8) 啓蒙時代後期のヴァイセの児童演劇は、ドイツ演劇史でも先駆的な試みである。手があまりつけられてこなかったそれら作品の作劇法の特徴を調べて、ドイツ語学文学国際学会 (IVG、2021 年 7 月 28 日イタリア・パレルモ大学 zoom 開催) において“Dramentechnik und utopische Aufklaerung in den Kinderschauspielen Christian Felix Weisses”と題する口頭発表をした。ポーランドやドイツの研究者から議論において積極的な反応をいただいた。

ヴァイセの年長の子ども達、青少年向けに書かれた戯曲も研究を進展させ、広島独文学会(2023 年 3 月 19 日広島大学 zoom 開催) では、「C.F.ヴァイセの青少年向け演劇にみる劇作術」と題して口頭発表をした。

2022 年度

(9) ヴァイセの青少年向け演劇における作劇法と少年少女像を検討し、日本演劇学会全国大会で発表した。青少年向け演劇では登場人物は成長して十代半ばになり、危機にある父を賢い娘や息子達が英知を合わせて助ける。親から見た理想的な少年少女像が描写される。本論文は『ドイツ語文化圏研究』第 19 号に掲載された。

2021 年イタリアのパレルモ大学で zoom 開催されたドイツ語学文学国際学会で発表したヴァイセの児童演劇とユートピア性についての研究が、“Dramentechnik und utopische Aufklaerung in den Kinderschauspielen Christian Felix Weisses”として Peter Lang 社より発行された IVG 論文集に所収された。

(10) 変装と策略を使う作劇法を、ゴットシェート夫人と初期レッシングの喜劇で分析し、比較した。ゴットシェート夫人では仮病と偽医者と変装の手法が、レッシングの『若い学者』『女嫌い』『ユダヤ人』では、混乱をもたらす手紙のトリック、女嫌いの父親を欺く変装の手法、罪をなすりつけるためにユダヤ人に変装する手法が見られる。この研究は日本独文学会中国四国支部研究発表会 (於 岡山大学 2022 年 10 月) で発表した。

(11) 啓蒙後期のレッシングの喜劇『ミンナ・フォン・バルンヘルム』やヴァイセの喜劇『アマーリア』や児童演劇に共通する、お金をめぐる友情の描写、策略の手法、通底する博愛精神について、J.フォーグルの「オイコディツェー」(神の見えざる手) 理論を援用して分析し、日本独文学会第 62 回文化ゼミナール（於　慶應義塾大学）にて、“Geldproblem, Intrigen und Philanthropie in Lessings und Weisses Komoedien der spaeten Aufklaerung”と題する口頭発表をした。啓蒙後期のレッシングとヴァイセの喜劇における作劇法で、両者に共通するお金をめぐる友情と博愛精神の描写からは、啓蒙時代のユートピアの希望が読み取れる。指環のトリックと担保によるお金の立て替え、施しや人助けなどは、レッシングの『ミンナ・フォン・バルンヘルム』やヴァイセの『アマーリア』や『大金持ちの両親のよい子達』等に共通する。

2023 年度

コロナ禍で延期していたドイツ渡航と現地での文献調査は、円安の影響もあり、9 月滞在先と期間を限定して行なうことにした。ヴォルフェンビュッテルの公爵立図書館では最新論文と演劇史や移動劇団、劇作家と俳優の関係に関する文献を渉猟した。ケルン大学演劇文庫では、レッシングとヴァイセと交流があった 18 世紀の役者、ノイバー、シェーネマン、コッホ、エクホーフ、アッカーマン、コッツェブー等の活動と受容の広がりを調査した。

(12) 秋の広島独文学会では、レッシングとヴァイセの『エフェズスの寡婦』における作劇法を比較分析し、口頭発表をした。この研究は論文「二つの『エフェズスの寡婦』―レッシングと C.F.ヴァイセの作劇法」として、『表現技術研究』第 19 号(2024)pp.41-54 に掲載された。

(13) また、レッシングとヴァイセの喜劇の代表作におけるお金の役割と博愛精神、策略の手法を比較して、お金は窮地に陥った人を助けるために使われたこと、お金を巡る人間関係に見えざる摂理が働き、ユートピア的博愛精神が見られることを明らかにした。この論文“Geldproblem, Intrigen und Philanthropie in Lessings und Weisses Komoedien der spaeten Aufklaerung”は日本独文学会編「第 62 回ドイツ文化ゼミナール論文集」(2024 年、編集中) に掲載予定である。

(14) 今回の研究で取り組んだレッシング喜劇のうち『若い学者』『女嫌い』『ユダヤ人』を翻訳し終え、2024 年度末に出版予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計12件（うち査読付論文　9件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　9件）

１．著者名 小林 英起子	４．巻 19
２．論文標題 二つの喜劇『エフェズスの寡婦』－レッシングとC.F.ヴァイセの作劇法	５．発行年 2024年
３．雑誌名 表現技術研究	６．最初と最後の頁 41～54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/55152	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Ekiko Kobayashi	４．巻 1
２．論文標題 Geldprobleme, Intrigen und Philanthropie in Lessings und Weisses Komoedien der spaeten Aufklaerung	５．発行年 2024年
３．雑誌名 Dokumentation des 62. Kulturseminars. Japanische Gesellschaft fuer Germanistik (Hrsg.)	６．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小林英起子	４．巻 19
２．論文標題 クリスチャン・フェーリクス・ヴァイセの青少年向け演劇　ー作劇法と少年少女像をめぐってー	５．発行年 2023年
３．雑誌名 ドイツ語文化圏研究	６．最初と最後の頁 27- 48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Ekiko KOBAYASHI	４．巻 Bd.4
２．論文標題 Dramentechnik und utopische Aufklaerung in den Kinderschauspielen Christian Felix Weisses	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Jahrbuch fuer Internationale Germanistik. Wege der Germanistik in transkultureller Perspektive. Akten der XIV. Kongresses der IVG. Bern: Peter Lang	６．最初と最後の頁 261-269
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Ekiko KOBAYASHI	4．巻 Bd.2
2．論文標題 Theaterdisziplin und Aufklaerung mit Idylle: Das Schaefer Fest oder die Herbstfreude von Caroline Neuber	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Tagungsband der ≪Asiatischen Germanistentagung 2016 in Seoul≫ Jahrbuch fuer Internationale Germanistik Reihe A - Band 146. Bern: Peter Lang	6．最初と最後の頁 49-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小林英起子	4．巻 54
2．論文標題 啓蒙喜劇の作劇法をめぐる比較考察 ーJ．E．シュレーゲルの『忙しい怠け者』とC．F．ヴァイセの『アマーリア』を例に	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『ドイツ文学論集』日本独文学会中国四国支部	6．最初と最後の頁 21-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小林英起子	4．巻 34
2．論文標題 フリーデリケ・カロリーネ・ノイバーの序幕と喜劇におけるアレゴリーと娯楽性	5．発行年 2021年
3．雑誌名 広島ドイツ文学	6．最初と最後の頁 63-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Ekiko Kobayashi	4．巻 2
2．論文標題 Theaterdisziplin und Aufklaerung mit Idylle: Das Schaefer Fest oder die Herbstfreude von Caroline Neuber	5．発行年 2022年
3．雑誌名 AGT-Tagungsband. Band 146 des Jahrbuchs fuer Internationale Germanistik	6．最初と最後の頁 49-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小林英起子	4．巻 15
2．論文標題 レッシング『ハンブルク演劇論』におけるクリスチャン・フェーリクス・ヴァイセ批評　―　『アマーリア』の劇作術と上演をめぐって	5．発行年 2020年
3．雑誌名 表現技術研究	6．最初と最後の頁 (17)-(25)
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/49079	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小林英起子	4．巻 80
2．論文標題 クリスチャン・フェーリクス・ヴァイセの児童演劇にみる作劇法	5．発行年 2020年
3．雑誌名 広島大学文学部論集	6．最初と最後の頁 27-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Ekiko KOBAYASHI	4．巻 1
2．論文標題 Philanthropie in der Kinderwelt - Das Bild von Armut und Reichtum in C.F. Weisses Kinderschauspielen	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Einheit in der Vielheit? Germanistik zwischen Divergenz und Konvergenz. Asiatische Germanistentagung 2019 in Sapporo. Muroi, YOSHIYUKI (Hrsg.). Muenchen: Iudicium Verlag.	6．最初と最後の頁 373-379
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小林英起子	4．巻 17
2．論文標題 レッシングの『ハンブルク演劇論』における演技観	5．発行年 2021年
3．雑誌名 ドイツ語文化圏研究	6．最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 小林英起子
2．発表標題 二つの『エフェズスの老貴婦人』―レッシングとヴァイセの作劇法
3．学会等名 広島独文学会 第106回 研究発表会
4．発表年 2023年

1．発表者名 小林英起子
2．発表標題 クリスチャン・フェーリクス・ヴァイセの青少年向け演劇 ー作劇法と少年少女像をめぐって
3．学会等名 日本演劇学会全国大会
4．発表年 2022年

1．発表者名 小林英起子
2．発表標題 啓蒙喜劇における変装と策略の作劇法　―ゴットシェート夫人とレッシングの喜劇を例に
3．学会等名 日本独文学会中国四国支部2022年度研究発表会
4．発表年 2022年

1．発表者名 Ekiko KOBAYASHI
2．発表標題 Geldprobleme, Intrigen und Philanthropie in Lessings und Weisses Komoedien der spaeten Aufklaerung
3．学会等名 62. Kulturseminar der Japanischen Gesellschaft fuer Germanistik 2023
4．発表年 2023年

１．発表者名 Ekiko Kobayashi
２．発表標題 Dramentechnik und utopische Aufklaerung in den Kinderschauspielen Christian Felix Weisses
３．学会等名 XIV. Kongress der internationalen Vereinigung fuer Germanistik (IVG) Palermo（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 小林英起子
２．発表標題 C. F. ヴァイセの青少年向け演劇にみる劇作術
３．学会等名 広島独文学会第103回研究発表会
４．発表年 2022年

１．発表者名 小林英起子
２．発表標題 啓蒙喜劇の作劇法の比較　― J.E.シュレーゲルの『忙しげな怠け者』とC.F.ヴァイセの『貧乏と徳操』、『策略には策略を』を例に
３．学会等名 広島独文学会第101回研究発表会（広島大学zoom開催）
４．発表年 2020年

１．発表者名 小林英起子
２．発表標題 C.F.ヴァイセの児童演劇 ―ドラマの技法と啓蒙のユートピア
３．学会等名 2020年度日本演劇学会研究集会（京都芸術大学zoom開催）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計1件

1．著者名 小林英起子	4．発行年 2023年
2．出版社 広大生協プリントサービス	5．総ページ数 84
3．書名 ドイツ文学史概論・資料	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関